

平成 22 年 度 中 間 評 価 表

年 度 当 初				評 価 結 果 (10)月		
評価項目	具体目標	目標(年度末の目指す姿)	目標達成のための方策	経過・達成状況	評価	改善方策
1. 確かな学力の育成	① 授業改善と学力の定着	○教材・指導法の工夫と学習内容の精選により、わかりやすい授業に努め、生徒の学力を向上させる。 ○積極的な授業公開により、授業改善を行う。	○授業評価アンケートの分析をとおして授業の改善に努め、生徒の意欲喚起につなげる。 ○各科・各教科での授業を公開し事後の反省会等を持ち、その改善につなげる。	○授業評価アンケートを実施し、生徒の学習状況や理解度を把握するとともに授業改善に活かしている。 ○各教科から公開授業計画が出され実施されつつある。	C	○前時間までの授業内容について確認をし、生徒の理解度や意欲を高める工夫を行う。 ○研修会への参加や公開授業の参観を通して研鑽に努める。
	② 主体的な学習態度と実践力の育成	○自宅学習時間が理数工学科では2時間、工業学科では1時間以上とする。30分未満の生徒の割合を3割未満とする。 ○読書への興味・関心を喚起し、読書が習慣化するよう、朝の読書を実施する。 ○部活動での中国大会・全国大会への出場者数の増加を目指す。	○生徒・保護者との面談を通して、進路目標の早期確立を図り、主体的な学習態度を育む。 ○自宅学習時間調査を分析し、学習の習慣化につなげる。 ○朝の読書を実施し、読書の習慣化をはかる。 ○生徒が部活動に主体的な取り組みるように、教職員の支援体制を整える。	○自己理解を深めさせ進路目標を早期に確立させるために、進路希望調査や進路に関するLHRや説明会、補習や各種模試を実施している。 ○自宅学習調査結果では理数工学科と工業学科3年生では学習時間が増加傾向にあるが、工業学科1・2年生では減少している。 ○朝読書が定着しつつあり、図書館の貸出冊数も1年生を中心に増加傾向にある。 ○部活動入部率は80.5%で昨年度を8%上回っている。 ○部活動の中国大会出場者は昨年度末の53名に対し本年度はすでに64名、全国大会は昨年度末の21名に対しすでに24名とそれぞれ上回っている。	C	○進路目標を確立させるために、進路希望調査や進路LHRや進学補習の取り組みをすすめていく。 ○課題を出すなど自宅学習を促すとともに、自ら学習できる力を養っていく。 ○朝読書の習慣化と自主的な読書への取り組みをさらにすすめていく。 ○部活動について、女子生徒や文化部・同好会の活動を支援していく必要がある。
2. 豊かな人間性の育成	① 互いを尊重する態度と社会性の涵養	○望ましい集団づくりに心がけるとともに、生徒が集団の中でいきいきと活動できるようにする。 ○人権教育を充実させるため、地域・関係機関等と連携を図る。 ○校外での研修により教職員の実践力を高める。	○Q－Uに替えてハイパーQ－Uを実施し、分析をとおして、クラス全体や生徒の状況を把握し、指導・支援にいかす。 ○性教育を中心としながら、日々のあらゆる教育活動をとおして「他者を思いやる力」を育てる。 ○生活の中にある問題を適宜捉え、自らの意識のありようを振り返る機会を持つようにする。 ○校外での人権教育「一人一研修」の取組を実践する。	○1学期にハイパーQ－Uを実施し、生徒の実態把握に努めた。 ○7月に性教育講演会を実施し、性に関する知識と命の尊さを学んだ。 ○人権教育LHRだけでなく、教科の学習等でも人権問題について考える機会を設定した。 ○人権教育の校外研修への参加者は、現段階で昨年とほぼ同じ。取り組み率はまだ少ない状況にある。(本年度15名／66名 昨年度20名／70名)	C	○ハイパーQ－Uの結果を、生徒理解や指導に生かす。 ○12月に性教育職員研修及びLHRを実施し、講演会で学んだことをさらに深める。 ○人権教育LHRの公開や校外研修への参加によって、教職員の人権意識の向上に努める。 ○人権研修会等の案内を行うなかで研修参加の意義を伝え、参加を促す。
	② 健全な心身と社会貢献精神の育成	○職員一人ひとりが、ボランティア活動への認識を深め、各種ボランティア活動への生徒の積極的な参加を促す。 ○校内環境の整備に留意し、挨拶ができる生徒、身の回りの整理整頓できる生徒を育てる。 ○本年度のTEASⅡの目標を生徒・職員に周知徹底し、環境に関する意識をよりいっそう高め、目標の達成を目指す。	○地域の美化活動への参加を呼びかける。 ○テクノボランティア等、ボランティア内容の検討等を行い、生徒のボランティア意識を高める。 ○5S（整理・整頓・清掃・清潔・しつけ）・あさひ（挨拶・作法・人の話をしっかり聞く）の指導を徹底する。 ○TEASⅡ講演会や環境LHRをとおして、環境改善活動をよりいっそう推進し、目標を達成できるよう生徒、職員の意識啓発を高める。 ○生徒の生活状況を把握し、関係職員と連携して相談活動にあたる。	○昨年度に比べ各種ボランティア活動に多くの生徒が参加している。 ○5S・あさひの取り組みが徹底されていない。 ○環境LHRを実施し、可燃ごみは削減されているが、電力使用量は増加している。 ○年度比較では欠席・早退は横ばい、遅刻はやや増加傾向にある。 ○生活実態調査の結果、睡眠時間の少なさが課題としてあがった。学校保健委員会で協議し、学校・保護者・生徒の立場で取り組むべきことを確認した。	C	○今後も多くの生徒が参加できるよう、募集の方法を工夫する。 ○LHR等を使って、5S・あさひの取り組みについて具体的に考えさせる。 ○TEAS講演会を11月に実施するとともに、節電に心がけるよう呼び掛ける。 ○基本的生活習慣の確立について、家庭との連携をさらに図る。 ○生活状況について、各クラスへ呼びかけたり保健だよりを配布したりするなど、生徒への啓発を行う。
3. キャリア教育の充実と生徒の進路実現	① 専門的な知識・技術の習得	○一人一資格以上の取得を目指す。 ○ものづくりの楽しさを実感させ、専門教科への興味・関心を喚起する。	○工業学科は全国工業高等学校長会主催の各種検定と、理数工学科は英検・漢検・数検に積極的に挑戦できるよう、指導体制を整備する。 ○高校生「ものづくりコンテスト」への参加を奨励し、技術力を高める。 ○課題研究をとおして生徒の探究心や表現力を育成する。 ○放課後補習や勉強会などへの積極的な参加を募り、各種資格への合格や学力の向上を図る。	○資格検定の受験の奨励や特別補習による継続的な指導に努めている。 ○ものづくりコンテストや各種競技会への参加を奨励しているが、一部の生徒や部活動の取り組みに留まり全体には十分には反映されていない。 ○課題研究の中で一部の生徒が鳥工版デュアルシステムをするなど、課題研究の内容を充実させ計画どおり実施している。 ○各種資格取得補習の実技指導を社会人講師と連携をとりながら充実させ、合格者の増加に努めた。	C	○積極的な資格取得指導がなされており指導を継続していく。 ○ものづくりコンテストなど各種競技会への取り組みを、校内予選をするなどの工夫をし全体へ反映させていく。 ○各科毎の課題研究発表会や2月に予定している合同課題研究発表会をとおして、引き続き探究心や表現力を養成していく。 ○補習への積極的な参加を募り、合格や学力向上にむけての指導を継続していく。また、資格取得に留まらず各種競技会への挑戦など、学んだ知識や技術を発展的な取り組みに繋げていく。
	② 職業意識の育成と進路指導の徹底	○自己の進路実現のために必要な学力・資質を養成する。 ○望ましい職業観・勤労観・社会性を育てる。	○企業見学やインターンシップを実施し、職業観、勤労観を養う。 ○進路説明会や各種模試の実施、進路資料を充実させ、進路意識の高揚を図る。 ○進学補習への自主的な参加を図るとともに、進学模試の受験を促進し、進路決定できる力を養っていく。	○企業見学会やインターンシップ（工業学科全科で5日間実施）を計画どおり実施。一部に意識の低い生徒があったが、企業との協力した指導により職業観を養うことが出来た。 ○3年生の応募前職場見学会、求人事業所説明会、進路説明会をはじめ、各学年毎に進路LHR、模試・諸検査等を行い、進路意識を高め個々の進路に応じた適切な指導を行っている。 ○進学補習を実施することで、学ぶ意欲の喚起や自主的な学びにつなげ、学力の定着を図った。一方、工業学科生徒の進学模試の受験希望が少なく、意欲の喚起に十分つなげられなかった。	C	○企業見学会、インターンシップの事前指導をより充実させる。 ○12月に予定している進路説明会や進路セミナーなどで、生徒の進路意識の高揚を引き続き図る。また、進学補習への自主的かつ積極的な参加を徹底するとともに、進学模試の結果を分析し効率的な学習が出来るように努める。 ○進学補習への自主的かつ積極的な参加の徹底を図るとともに、工業学科生徒に対して課題研究の充実や資格取得の推進、進学模試への受験促進をし、自発的に進路決定できる能力を養っていく。
4. 地域や産業界とのパートナーシップの確立	① 地域や産業界との連携強化	○地域や企業との連携を一層深める。 ○地域が求める人材のニーズを把握し、よりよい社会人を育成する。	○「鳥工版デュアルシステム」による専門的な技術の習得を図る。 ○鳥工産業教育懇話会等をおとして、企業と密接な情報交換を図る。	○鳥工版デュアルシステム 1学期に3年課題研究で実施した。各科(機械、制御・情報、電気)で企業4社、生徒14名。 ○6月に第1回鳥工産業教育懇話会を実施し、企業との情報交換を図った。	B	○鳥工版デュアルシステムの目的、意義について企業側との共通理解がさらに必要である。 ○第2回鳥工産業教育懇話会を開催予定である。さらに企業との密接な情報交換できる関係を構築する。
	② 開かれた学校づくりの推進	○学校の最新情報を発信するよう努める。 ○地域住民・近隣小中学生等に対して、鳥工をPRしていく。 ○課題研究発表会や鳥工TECなどで広く教育内容を発信する。 ○学年別懇談会、学科別懇談会等の1年間のPTA行事の参加率が昨年度以上となるよう努める。	○学校HPの更新を行い、最新の情報を発信する。 ○各科で研究、製作したものを鳥工TEC等で展示し、地域住民等に紹介する。 ○課題研究発表会を学校外で実施し、広く県民に公開する。 ○近隣の小中学生を対象とした「ものづくり教室」や「科学遊び広場」を実施し、ものづくりの魅力を発信する。 ○学年別懇談会、学科別懇談会等を、保護者の参加しやすい休日を利用して実施する。昨年度以上の参加率となるようにする。	○学校公式HPの更新が活発化している。 ○小学校へのALT派遣、中・高校でエキスパート教員による出前授業や公開授業を実施した。 ○学年別懇談会、科別PTAを土曜日に開催することにより多くの保護者の方が参加され、日程、内容ともに好評であった。特に科別PTAでは、昨年度比10%増であった。また、本校における教育活動への保護者の理解を得るよい機会となった。	B	○学校公式HPの更新を適宜図り地域、保護者へのPRを積極的に行う。 ○10月に開催する鳥工TECで生徒が研究・製作した作品を展示する。体験コーナーでは、各科のテーマに沿ったものづくりを地域住民に体験していただく。また、ものづくり教室も同時開催予定である。 ○2月に予定している合同課題研究発表会に向けて指導を徹底し、内容の充実を図る。

デュアルシステム：学校内で講義や実習を行い、企業で体験学習することによって生徒を育成するシステム

評価基準 A:十分達成 B:概ね達成 C:変化の兆し D:まだ不十分 E:目標・方策の見直し

〔100%〕 〔80%程度〕 〔60%程度〕 〔40%程度〕 〔20%程度〕